

トラークル研究

第九号

2012年10月

トラークル協会

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方
Tel 04-7150-5782 Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

トラークルの詩の最終三部作の表現

三 枝 紘 一

はじめに

ここで言うトラークルの最終三部作というのは、最後の二つの詩「Klage (嘆き) II」と「Grodek (グローデク)」及び「Im Osten (東部にて)」を指す。前二者は同じ時、東部ガリーツィェンの戦場で1914年の9月22日頃に創作され、10月25日にフィッカーの前で朗読された(この内「Grodek」は、その第一稿で、フィッカーによれば第二稿より2、3行長かった。1)これは散逸した)、文字通り詩人の最終作、いわゆる白鳥の歌であるが、「Im Osten」は、タイトルからすると東部戦線での作と一見思われるが、創作されたのは、大分前インスブルックでの作である。これはトラークルが出征する直前に成立した。東部戦線では、オーストリア・ハンガリー軍とロシア軍との最初の遭遇戦(Schlacht bei Krasnik)が8月22日から25日の間に行われている。したがってこの詩は8月24日の出征の直前に成立した蓋然性が高い。2)、3) いずれにせよ、時間の上では、約一ヶ月の間隔があるが、後から数えて三番目の詩であることは間違いないであろう。4)

この小論では、この三つの詩の各々の表現の特徴を示すとともに、この三部作に限らないことであるが、それまでの自らの詩を言わば「採石場」として、そこから語彙、表現を切り出し新しい詩に使用しているのが特徴である。そしてそれらを、この三部作において、どのように取り入れているかを検証する。ひいては、その上に立って、これらの詩の特質を炙り出し、更にはトラークルのポエティックの一端を多少なりとも明らかにすることを目的とする。

1.背景の示される表現

三つの詩とも戦争あるいは戦場を背景としていることが指摘できる。「Im Osten」と「Grodek」は、明らかに直接戦争を背景としている、と言っても、前者の場合は、戦場を見ていないで、おそらく報道等で知識を得て作られ、後者は戦場を実際見て作られているの違いがある。これに対して「Klage II」は、戦場で創作されたものであるが、直接的には戦場を背景としてはいない。ただ冒頭のSchlaf und Todは、かすかにそれを暗示しているが、間接的にも使用されている語彙には戦場や戦闘を示す語彙を欠いている。戦場の代わ

り、荒れ狂う大洋(第8詩行の Meer)が背景をなしている。これに関係する語彙としては、die eisige Woge, schaurigen Riffen, ein ängstlicher Kahnがある。戦争というものに呼び起こされた想念、不安が荒れ狂う大洋に仮託されて暗喩的ヴィジョンとして表現されていると言える。

先ず戦場を示す語彙を取り上げると、例えば「Im Osten」には、Soldaten が登場する。これは言うまでもなく東部戦線で戦っている現実の兵士達であると想定して差し支えない。しかしトラークルの詩にはすでに Soldaten は登場している。例えば、1914年春に成立した「Die Schwermut (憂鬱)」の Ihr Soldaten! (HKA.I. S.161)。しかし、これは内実が異なると言える。この詩は、戦争あるいは戦場を直接背景とした詩ではないからである。このいわゆるチロルアルプス調と言われる最も表現主義的な詩の特徴は、激しい感情、ヴィジョンの表出にあり、その手段としてチロルアルプスの様々な形象 (Bergstrom, Föhren, Dorf 等) を使用しながらも、アルプスの風景の描写をしているのではない。と同時に Soldaten のみならず戦場の様々な形象 (Heers, Helm, Männergebein 等) が使用されている。それらを手段として内面の激しいヴィジョンを構成しているのである。ちなみにアルプスの風景と戦場を重ね合わせたモンタージュ手法を思わせるが、ランボーの詩「Marine (海景)」⁵⁾ ほどの緊密性はない。あくまでも主眼は、それらを手段とした内面の激しいヴィジョンの構成なのである。したがって Ihr Soldaten! の Soldaten も現実の兵士達でなく他の戦場の形象と並んでヴィジョンの構成要素の一つなのである。

「Im Osten」の Soldaten と同じようなことが「Grodek」の Krieger についても言える。この Krieger という語彙は、すでに詩「Karl Kraus (カール・クラウス)」に使われている。Zürnender Magier, / Dem unter flammendem Mantel der blaue Panzer des Kriegers kllirrt.(HKA.I. S.123)。この場合「Die Schwermut」の Soldaten と異なって Krieger は、言うまでもなく比喩 (メタファー) として使われている。しかし「Grodek」の Sterbende Krieger はグロデクで戦った現実の戦士達と読者は明らかに想定できる。

この Sterbende Krieger の他に「Grodek」には戦場を示す生々しい語が組み込まれている。tödlichen Waffen、die wilde Klage / Ihrer zerbrochenen Münder、Das vergoßne Blut、die blutenden Häupter。

いずれにせよ、実見している(「Grodek」)にしる、実見していない(「Im Osten」)にしる、この二つの詩は、戦場、戦争を背景としているし、「Klage II」は、それを直接的には背景としていないが、それを念頭に置けば、理解が深まる詩であり、間接的にはそれを背景としていると言ってよいであろう。このように背景の窺われる詩は、従来の詩の表現である。前述したチロルアルプス調と言われる表現とは異なる。後者はヴィジョンの連鎖であり、背景というものがない詩である。これは現代詩の最も大きなメルクマールの一つである。トラークルはここにきて伝統的な、背景を持った詩の表現をしたと言える。

2. 比喩的表現

1) 直喩表現

「Im Osten」には、初期の作品には、見られていたが、その後長らく途絶えていた直喩表現が復活する。

Den wilden Orgeln des Wintersturms
Gleicht des Volkes finstrer Zorn,

gleichen の使用は 8 例見られるが、1913 年以降は使用が途絶えていた。またその形容詞形 gleich の使用例は、13 例見られるが、ほとんど極く初期に限られ、後期においては 2 例見られるに過ぎない。最も直喩表現に使用される wie (ように) も既に 1912 年から 1913 年かけての冬以降見られない。直喩表現は、伝統的なレトリックである。現代詩においては、陳腐なレトリックであるとされ避けられる傾向にある。トラークルの場合も意識的にしばらく避けていたと見られなくもない。むしろヴィジョンで構成される詩には、直喩は本質的に相いれないと言うことが出来るかもしれない。

2) 暗喩的表現

前に挙げた詩「Die Schwermut」のようにヴィジョンを中心に構成された詩は、暗喩的表現が読みとり難い。つまり暗喩であるのか、単なるヴィジョンの構成要素であるのかの腑分けが難しい。これに対して背景のある詩は、背景と表現されたものという二重構造をなしているので、それは読み取りやすい。これら三つの詩は、ともに戦争あるいは戦場を背景として成立している（もちろん「Klage II」は、それが直接的でなく荒れ狂う大洋に仮託されているが）ので、暗喩的表現が明らかに見てとれる。

「Im Osten」においては、戦争の暴力の暗喩的表現が、Die purpurne Woge der Schlacht, Dornige Wildnis umgürtet die Stadt, Wilde Wölfe brachen durchs Tor 等に明らかに見て取れる。

「Klage II」においては goldnes Bildnis は、Herbert Kunert が「ヒューマニズムの数世紀を通して養われた人類の理想の数々」6) と述べているが、理想の人間像を暗示している。

更には Kahn も明らかに暗喩的表現と言うことが出来る。

Sieh ein ängstlicher Kahn versinkt

Kahn の初出は、1912 年秋成立の「Verklärter Herbst (晴れやかな秋)」である。その後十数回登場するが、詩的主体が乗った Kahn が川を下り、また池で揺れたり、というイメ

ージが多い、そしてその Kahn に様々な色彩形容詞 (silbern, rot, schwarz, blau, schwärzlich) が冠せられている場合が多い。ただ 1914 年春になると、ein goldener Kahn が 2 例見られる。これらは die Sonne の暗喩とすることができる。Am Hügel sinkt ein goldener Kahn, der Wolken blaue Ruh「<Vorhölle (リンボ) >1.Fassung der 1.Strophe」(HKA.I. S.398)、Ein goldener Kahn sank die Sonne am einsamen Hügel「Erinnerung (思い出) Verwandlung des Bösen 1.Fassung (fragment)」(HKA.I. S.382)。

しかし「Klage II」の Kahn は、単なる暗喩でなく、das lyrische Ich のメタファーになりおおせている。それは、いままで冠せられていなかった主観的感情語 ängstlich がそのメルクマールとなる。またこの語が置かれている前後の関連からもこれが裏書きされる。つまり 4 行目の Woge に導かれて、荒れた大洋が展開され、これに翻弄される危殆に瀕した人間存在が示されている。Sieh は、大洋にひとり漂い、沈まんとする Kahn である das lyrische Ich の Schwester への要請である。その上ほぼ詩全体が暗喩的世界と化しているとも言える。

「Grodek」においてはリアルな表現が卓越しているが、eherne Altäre、Die ungeborenen Enkel 等が暗喩的表現と言える。

3. リアルな表現

リアルな表現は、一般に一見トラークルの詩には、無縁に思われるが、断片的に見られる。例えば In Körben tragen Frauen Eingeweide, / Ein ekelhafter Zug voll Schmutz und Räude, / Kommen sie aus der Dämmerung hervor. 「Vorstadt im Föhn(フェーンの吹く場末)」(HKA.I. S.51)は、背景を知らないと幻想的な表現と取られかねないが、このむしろ自然主義的なイメージは、実景である。ザルツブルクの市の屠殺場の前の実際の光景である。そう見るとリアルな表現になる。7)

リアルな表現は、この三部作を見ると、「Klage II」は、想念の詩なので勿論見られないし、「Im Osten」には写実的な表現に近いものが散見するに過ぎない。後者は主に想像によって創られた詩なので表現に生々しさが欠けている。これに対して「Grodek」には、特にその前半部 (その最初の六行は全くの写実と言ってよい) にはリアルな表現が見られる。これは戦闘という圧倒的な現実が内面の想念の表出を抑え込んだことによるものと思われる。もちろんそれは感じとられた現実ではあるが、迫真的である。

4. メッセージ的表現

トラークルの詩は、本質的に想念で押していく詩ではないので統一的なメッセージ的内容を持たない。しかし断片的なメッセージは散見する。そしてそれは閃きのようなものであり、深遠なものでありながら、それを統一的なメッセージとして論理化するのが難しい。

この三部作においては、「Im Osten」にはメッセージは込められていないが、「Klage II」にはメッセージが直接的でなく暗喩として、危殆に瀕している人間性がやや常套的表現によって暗示されている。Des Menschen goldnes Bildnis / Verschlänge die eisige Woge / Der Ewigkeit. An schaurigen Riffen / Zerschellt der purpurne Leib

しかし「Grodek」最終三行は、メッセージ的色合いが濃い。

O stolzere Trauer! Ihr ehernen Altäre
Die heiße Flamme des Geistes nährt heute ein gewaltiger Schmerz,
Die ungeborenen Enkel.

同じようにメタファーで表現されているが、それが「Im Osten」や「Klage II」で表現された既成的なそれではなく、創造的なメタファーである。しかしやはり断片的であることは否めず、この意味するところのものは深いが難しい。例えばDie ungeborenen Enkel一つをとってみても、それが「生れてこなかった Enkel」なのか、あるいは「未だ生れない Enkel」なのか、つまりネガティブに捉えるのか、あるいはポジティブに捉えるのか、解釈が分かれる。8) いずれにせよ、この最終三詩行はトラークルの遺言的メッセージと言えるパセティックな調子を帯びていることは感じとれる。

5. 初出の表現

この三つの詩から初出の語及び表現を抜き出してみると、

「Im Osten」

den wilden Orgel, Wintersturm, wilde Wölfe, Schlacht, entlaubter Sterne,
Erschlagenen 等

「Klage II」

die düstern Adler, umrauschen, goldnes Bildnis, die eisige Woge, Riffen 等

「Grodek」

die herbstlichen Wälder, tödlichen Waffen, blauen Seen, hinrollen, düsterr,
Weidengrund, sterbende Krieger, rotes Gewölk, das vergoßne Blut, mondne Kühle,
münden, goldnem Gezweig, die blutenden Häupter, stolzere Trauer, eherne Ältäre,
heiße Flamme, nähren, ein gewaltiger Schmerz, Die ungeborenen Enkel 等がある。

「Grodek」には戦場における生々しい現象や景物の初出が多い。Schlacht, Erschlagenen, Vergossen, die blutenden Häupter。これらは、やはり戦場が直接背景をなしていることから詩に取り入れられたのは明らかである。

発表者が、その評釈『「Grodek」について』において、すでに指摘しているが、「Grodek」

には、上に挙げた初出の表現に幾つか常套的で陳腐と言っていい表現がみられる。herbstlichen Wälder、tödlichen Waffen、blauen See、heiße Flamme 等。Wald はトラークルの詩に頻繁に現れる景物であるが、それ以上に使用されている herbstlich が冠せられるのは、ここにおいて最初にして最後である。これよりも注目すべきは、blauen Seen である。トラークルの詩には、そもそも See (湖) の使用は少ない。これを含めて三例に過ぎない。むしろ、Weiher (34 例)、Teich (18 例) Tümpel (5 例) が圧倒的に多い。このことは、ザルツブルク周辺には湖が少なく、Weiher、Teich、Tümpel が多いことによるのであろう。ザルツカンマーグートには多くの湖があるが、そこまで足をのびさなかつたものと思われる。これに対してグロデク近辺には幾つかの湖が認められる。

この blauen Seen という常套を超えて陳腐極まりない表現は、これと並列される herbstlichen Wälder と goldenen Ebenen とともに日常的な、平和的な風景を形成している。しかしおりしもここは悲惨な戦場となっている。その意味で逆にこの常套的表現は戦場と鮮明なコントラストをなし、常套的でありながら、否、そうであるがゆえにここでは効果的に活かされている。つまりこれらの形象により対照的に戦場、ひいては戦争の悲惨さを増幅する。

6. 同一及び類似の表現の繰り返しあるいは変奏

トラークルの詩の特徴の一つとして、別な詩の同じような表現が繰り返し登場することである。この最終三部作にもその現象が見られる。

「Im Osten」: Im Schatten der herbstlichen Esche これは、「Anif (アニフ)」にある (Stille wohnst du) im Schatten der herbstlichen Esche, (HKA.I. S.114) と全く同じである。

「Klage II」: Und es klagt die dunkle Stimme に対して Und es sprach eine dunkle Stimme aus mir 「Offenbarung und Untergang (啓示と没落)」 (HKA.I. S.168) という類似の既出の表現がある。

「Grodek」: Und leise tönen im Rohr die dunkeln Flöten des Herbstes. に対して Und die sanften Flöten des Herbstes / Schweigen im Rohr 「Geistliche Dämmerung (魂の薄明)」 (HKA.I. S.118) と Den dunkeln Flöten des< . . . > im dünnen Rohr 「Lange lauscht der Mönch dem sterbenden Vogel am Waldsaum . . . (僧侶は森の縁で死に行ゆく鳥の声に長らく耳を傾ける . . .)」 (HKA.I. S.421) という二つの類似の既出の表現がある。これらは、他の詩人の詩からであれば、剽窃に近いといえるが、自らの作品からでは、必ずしも剽窃とは言えない。なぜこのような同一あるいは類似の表現が繰り返されるのが問題となるが、容易には解明され難い。一つの考え方として、想念で押していく詩人の繰り返し現れる概念に当たるのが、イメージで押していくトラークルの、やはり繰り返し現れる形象と言えるのではないだろうか。いずれにせよ、それらはモチーフ化していると言

っても差し支えないであろう。

しかし仔細にみると同じ語、同じフレーズの多くが異なる文脈の中で変容、あるいは、言ってみれば変奏されているのが分かる。

同一表現がコンテキストの中で異なる働きをしている例を見ると、「Im Osten」では、

Mit zerbrochenen Braunen, silbernen Armen

Winkt sterbenden Soldaten die Nacht.

この中の silbernen Armen には先例がある。Ach noch tönen von wilden Gewittern die silbernen Arme mir. 「Offenbarung und Untergang」(HKA.I. S.168)。後者の silberne Arme は、稲妻によって一瞬照らし出されて銀色に光って見える腕と解釈できるが、前者のそれは、イメージとしては、瀕死の兵士達の「砕かれた眉と銀色の腕（これは前行に星〈Sterne〉が示されているので、その光が当たって銀色に見える腕と取れなくはない）」が、構文としては、この眉と腕は、夜の属性である。これを裏付けるのは、既出の Über unsere Gräber / Beugt sich die zerbrochene Stirne der Nacht. 「Untergang (没落) 5.Fassung」(HKA.I. S.116)である。ここでは Arme ではなく Stirne であるが、いずれも夜の属性であり、夜が擬人化されている。そうすると「Im Osten」の、この表現は、一つのヴィジョンであり、やはり戦場が想像の世界に起因していることを裏書きしている。

Dornige Wildnis umgürtet die Stadt.

これに対して In dorniger Wildnis folgte der Dunkle . . . 「Traum und Umnachtung (夢と錯乱)」(HKA.I. S.150)という既出の表現がある。後者の dorniger Wildnis は、実景ではなくヴィジョンであるが、暗喩とは言えない。しかし前者の Dorniges Wildnis は包圍軍の暗喩となっている。

「Klage II」においては、この例は数少ないが、前に取り上げた ein ängstlicher Kahn や goldnes Bildnis がその例である。前者は、ängstlich と結びつけられたことによって暗喩となり、後者は、sein eignes Blut und Bildnis 「Traum und Umnachtung」(HKA. Bd.I. S.150)、Dein bleiches Bildnis ist erblüht. 「Metamorphose (メタモルフォーゼ)」(HKA.Bd.I. S.252) 等と異なり golden と結びつけられたことによって象徴的表現に化している。

「Grodek」においては、

Sterbende Krieger, die wilde Klage

Ihrer zerbrochenen Münder

これに対して *Der Purpur ihrer zerbrochenen Münder* 「O das Wohnen in der Stille des dämmernden Gartens . . . (おお たそがれる庭の静寂に住まうことは . . .)」(HKA.I. S.314)という既出の表現がある。後者の *zerbrochenen Münder* (*ihrer* は *Schwester* を指す)は、幻想であるが、前者の *zerbrochenen Münder* は実景である。Lipinski の報告によれば、「死体は十層をなして積み上げられ、そこかしこで手がなお動き、青ざめた口が呻く」とある。ちなみにトラークルの詩では、この *zerbrochenen* が肉体の一部に冠せられる例が過半を占めている。Augen(3)、Sterne(3)、Mund(2)、Brust(2)、Brauen(1)、Armen(1)、Hände(1)。

Alle Straßen münden in schwarze Verwesung.

これに対して、すでに *schwarze Verwesung* は2つ使用例がある。Erscheint die Schwester in Herbst und schwarzer Verwesung. 「Ruh und Schweigen (安らぎと沈黙)」(HKA. I. S113)、Bei der Mühle hat man die Leiche eines Knaben gefunden. Die Waisen des Dorfes sangen seine schwarze Verwesung. 「*Dramenfragment* (ドラマ断片) 1. *Fassung*」(HKA. I. S.455)。後者の2例は、季節の、あるいは子供の肉体の単なる腐朽に過ぎないが、前者は、包括的な普遍化された腐朽である。

この点に関して最も注目すべきところは、前出した既出の表現 *dornige Wildnis* 「Im Osten」、*zerbrochenen Münder*、*schwarze Verwesung* 「Grodek」等はまさに戦場に相応しい。また *sterbennd* と *Krieger*、*Soldaten*、及び *blutend* と *Häupter* との結びつき等も常套的と言えるほど当を得ている。このような既出のフレーズ、語が戦場という呵責なき現実によって迫真的なリアリティーを獲得したと言える。

まとめ

1. 伝統的表現様式の復活

直前の詩群のヴィジョンの連鎖である前衛的な様式に変わって、この三つの詩に内容は異なるが伝統的表現様式の復活が見られる。

先ず背景(「Im Osten」、「Grodek」では、戦争、戦場。「Klage II」では仮託された荒れ狂う大洋)が示される表現。次に直喩表現(「Im Osten」と明らかな暗喩的表現(「Im Osten」、「Klage II」)、さらには常套的な表現を含むリアルな表現(「Grodek」の前半部)、そしてトラークルの詩にはほとんど見られないメッセージ的表現(「Grodek」の最終三行)。

2. 同一あるいは類似表現の効果的応用

トラークルの詩には、もともと腐朽、滅び、死の表現が好んで多用されていた。それらの多くはヴィジョンの要素であったが、それらが奇しくも戦場という圧倒的な滅びと

死の現実の世界の表現要素に転用され、効果的に嵌め込まれて、命を賦活された。それらは言わば所を得たと言える。特に「Grodek」にこのことが如実に示されている。

註

- 1) ...es hat sich höchstens um eine Kürzung von zwei, drei Versen gehandelt,...(HKA.II. S.311)
- 2) Laut Ludwig v. Fickers Angabe im „Brenner“-Jahrbuch 1915 entstand das Gedicht im Augst 1914, also nach dem Beginn der Kriegshandlungen, Generalmobilmachung. Freilich hat Trakl schon im Mai militärische Motive in seinen Gedichten verarbeitet, und der Bezug im Titel könnte mit dem im Osten Österreich-Ungarns drohenden Krieg in Zusammenhang stehen. (IA.IV2. S.319)
- 3) Datierung : viell. schon Juli, spätestens bis 24. Aug.1914. (IA.IV2. S.319)
- 4) なお 8 月 24 日トラークルが出征する際、インスブルックの駅頭で見送りに来たフィッカーに手渡した紙片に書かれた短文 Gefühl in den Augenblicken totenähnlichen Seins : Alle Menschen sind der Liebe wert. / Erwachend fühlst du die Bitternis der Welt : darin ist alle deine ungelöste Schuld / dein Gedicht eine unvollkommene Sühne. (IA. Bd.IV2. S.323) があるが、これはアフォリズムと考え、除外する。
- 5) Rimbaud, Arthur : Leben und Dichtung. Übersetzungen von K. L. Ammer. Eingeleitet von Stefan Zweig. Leipzig. 1921. S.235.
- 6) Lehnert, Herbert : Struktur und Sprachmagie. Zur Methode der Lyrik-Interpretation. Stuttgart / Berlin / Köln / Mainz. 1972. S.114.
- 7)これとほぼ同じ表現が後期の詩「Herz (心臓)」に取り込まれている。Am kahlen Tor am Schlachthaus stand / Der armen Frauen Schar. / In jeden Korb / Fiel faules Fleisch und Eingeweide; Verfluchte Kost!
- 8) 前のポジティブな詩行 Die heiße Flamme des Geistes nährt heute ein gewaltiger Schmerz,から勘案すると、希望、それも微かな希望が込められた表現とみなすのが妥当と思われる。
- 9) 三枝絃一 : 詩「グローデク」評釈. In : 『G・トラークル研究』. 東京. 1995. S.161f.
- 10) Lipinski Mutmaßungen. S.391. — Der Bericht stammt aus der Frankfurter Zeitung von 7.10.1914.

テキスト

HKA=Historische-kritische Aufgabe. Georg Trakl Dichtungen und Briefe.

Herausgegeben von Walther Killy und Hans Szklenar. Bd.I,II. Salzburg. 1969.

IA =Innsbrucker Ausgabe. Georg Trakl Sämtliche und Briefwechsel. Bd.I. 2007.
Bd.II.1995. Bd. III. 1998. Bd. IV1. und Bd.IV2. 2000. Frankfurt am Main.

用語索引

Wetzel, Heinz : Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. Salzburg.
1971.

参考文献

- Bridgwater, Patrik : Georg Trakl and Poetry of the First World War. In : Londner Trakl-Symposion. Salzburg. 1981.
- Buck, Theo : Negative Utopie. Zu Georg Trakls Gedicht >>Grodek<<. Frühling der Seele. Pariser Trakl-Symposion. Hrg. Remy Colombat und Gerald Stieg. Innsbruck. 1995.
- Esselborn, Hans : Georg Trakl. Die Krise der Erlebenslyrik. Köln / Wien. 1981.
- Freund, Winfried : Deutsche Lyrik. Interpretation von Barock bis zur Gegenwart. München. 1990.
- Giese, Peter Christian : Interpretationshilfen. Lyrik des Expressionismus. Stuttgart / Dresden. 1992.
- Hiebel, Hans H. : Das Spektrum der modernen Poesie. Interpretationen deutschsprachiger Lyrik 1900-2000 im internationalen Kontext der Moderne. Teil 1.(1900–1945). Würzburg. 2005.
- Holzner, Johanna : Lyrik im Umfeld von Trakls >Grodek<. In : Georg Trakl und literarische Moderne. Tübingen. 2009.
- Sorg, Bernhard : Das lyrische Ich. Untersuchungen zu deutschen Gedichten von Gryphius bis Benn. Tübingen. 1984.
- Spinner, H.Kasper : Zur Struktur des lyrischen Ich. Frankfurt am Main. 1975.
- Steinkamp, Hildegard : Die Gedichte Georg Trakls vom Landschaftscode zur Mythopoesie . Frankfurt am Main / Bern / New York. 1988.
- Weichselbaum, Hans : Georg Trakl. Eine Biographie mit Bildern, Texten und Dokumenten. Salzburg. 1994.
- Williams, Eric : Schweigendes Tönen. Zur Wiederkehr der Flöten. In : Zyklische Kompositionsformen in Georg Trakls Dichtung. Szegeder Symposion. Hrg. von Karory Csuri. Tübingen. 1996.

インスブルック版の編集方針について

三 枝 紘 一

はじめに

トラークル全集のインスブルック版：Georg Trakl Sämtliche Werke und Briefwechsel Innsbrucker Ausgabe historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls herausgegeben von Eberhard Saueremann und Hermann Zwerschina Stroemfeld / Roterstern Frankfurt am Main / Basel (第二巻：1995年、第三巻：1998年、第四巻の1及び2：2000年、第一巻：2007年刊行)がBriefwechselの部を除いて完結しましたので、この版の特徴を見ていくと共にその編集方針を中心に据えて解説、検討し、ひいてはこれをいかに活用すれば今後の研究に役立つかを示すことをこの報告の目的とします。

まずインスブルック版刊行の目的が、1969年に刊行にされたWalther KillyとHans Szklener編纂によるHistorisch-kritische Ausgabe(HKA)ーインスブルック版もHistorisch-kritische Ausgabeを名乗っていますので、前者をザルツブルク版と通称しますーザルツブルク版(1987年に刊行されたその第二版も)が不十分であることと「トラークルの芸術上のランクを正当に評価すること」と謳われています。その理由を「彼の文学は現代精神の最も前衛的な言語的記念碑であると同時に最も謎を秘めたものの一つであるから」としています。そしてこの出版を促した背景として、この間に発展をみた編纂方法、詩人の作品と書簡の成立年代の研究の成果、コンピューターデータ処理の技術の発達、知られなかったテキストの出現等があったと述べられています。

編集方針は、最後に刊行された、その第一巻の序言(Vorwort)と編集報告(Editorischer Bericht)に述べられています。これを中心に解説、評価、批判します。

1) インスブルック版の内容と構成

まずインスブルック版の内容と構成をザルツブルク版のそれと対比して概観してみます。インスブルック版では詩が成立順に配列され、個々の詩に関しては、(1) Entstehungsgeschichte (成立史)、(2) Überlieferung (伝承)、(3) textgenetischer Überblick (テキスト生成概観)、(4) Einzelstellen - Erläuterungen (個々の箇所注釈)、(5) 影響及び受容史(Wirkungs - und Rezeptionsgeschichte)、が記載され、そして(6)

Textstufen (テキスト諸段階) が掲出されています。

「Entstehungsgeschichte」は、作品の稿体 (これを Textstufe 「テキスト段階」と呼称しています) が成立順にそれらに関連する事柄を含めて記述されています。「Überlieferung」は、稿体の所在、ザルツブルク版における収載ページ、稿体の状態、成立時、自筆かあるいは清書か否か等が纏められています。「textgenetischer Überblick」は、テキスト段階のそれぞれの特徴 (行数、詩節数、句読法の相違等) が指摘されています。「Einzelstellen-Erläuterungen」は、固有名詞の説明の他、当該の詩への影響が考えられる他の詩人の詩の箇所等が主に取り上げられています。「Wirkungs- und Rezeptionsgeschichte」は、この詩に関して後の文献に表われた箇所が示されています。しかしこのタイトルから普通考えられる他の詩人の作品への影響あるいは他の詩人の受容にはほとんど触れていません。次の最も重要な「諸稿体」の掲出においては、先ず自筆の稿体があれば、そのファクシミリ (写真) が左ページに掲げられ、それに加えてその自筆の活字への書き換えが右のページに掲げられていて対照して見られるよう配慮されています。

次に成立順に「成立段階 (稿体)」が掲出されています。その上、巻末にはファクシミリの全紙が掲載され、これについての解説が付されています。ザルツブルク版には、その第Ⅱ部に伝承は記載されていますが、稿体を除いてインスブルック版にある、その他の事項は記載されていません。稿体も部分的で掲出の仕方が分かりにくくなっています。これに対してインスブルック版では、前の稿体と2、3字ほどの違いであればその変更箇所を示すだけで、その稿体は掲出されていませんが、稿体のほとんど全部がまるまる掲出されています。またザルツブルク版では、纏められた詩『Gedichte (詩集)』、『Sebastian im Traum (夢の中のゼバスティアン)』等が第Ⅰ部 (原典版 Textband) に、稿体が第Ⅱ部 (資料版 Apparatband) に区別されて収載されていますが、インスブルック版では稿体と出版された詩あるいは発表された詩との区別がなく成立順に並列されて収載されています。

いずれにせよ、インスブルック版は現在参照しうる限りの資料を集め、それらを徹底的に考証し、利用者が利用しやすいように丁寧極まりなく、精緻この上なく秩序立て、纏め上げていると言えます。これは世界的に見ても書誌の歴史において未だに類例を見ない画期的な出版物と言えるでしょう。

2) インスブルック版の編集方針の特徴

1. 詩、またその稿体の成立順による配列と異稿(Varianten)の重視

結論的に言えば、それぞれの詩がほぼ年代順に配列されています。これがインスブルック版の最大の特徴であり、この点がこれまでの全集、即ちザルツブルク版とは全く異なる点であります。後者は主に詩集別に (『Gedichte (詩集)』、『Sebastian im Traum (夢の中

のゼバスティアン』、あるいは Brenner に掲載された詩、遺稿（この中には『Sammlung 1909 (1909 集)』を含む)等に纏められています。しかし個々の詩は成立順には配列されてはいません。このため詩の発展を見るには不便でありました。これに対してインスブルック版は、ほぼ成立年代順に配列されています。まずこれが一つの特徴であります。

しかしトラークルは成立時を自らほとんど記していないので、その決定は難しいところがあり、様々な傍証から成立時が決定あるいは推定されています。したがって成立は月単位、あるいは季節単位（第一巻の最初期の詩は年単位、長いものでは、例えば残された詩の中で最も早く書かれた「Der Heilige (聖者)」は 1906 年秋から 7 年と 2 年に亘っています)に纏められています。また第 4 巻の 2 に収載されている「Lebensalter (年齢)」は 1914 年の 6/7 月に、「Sommerneige (夏の傾き)」は同年の 7 月に、「Im Osten (東部にて)」は同年 7/8 月に成立とあります。ただし同じ期間に複数の詩が組み込まれている場合が多く、「Lebensalter」と同じ期間には七つの詩が組み込まれています。他の詩人にも見られることですが、トラークルは特に詩を *nacheinander* (順に) でなく *nebeneinander* (並行的) に書いています。つまり概ね一つの詩を書き終えたら次の詩に取り掛かるという直線的な形ではなく、むしろ多くの場合同時に二つ以上の詩を書いたり、一つの詩を中断し、他の詩を書き始めるという形をとっています。したがって詩作期間もまちまちで書き始めてから書き終えるまで短いもので数週間、長いもので数年間に亘ります。インスブルック版ではこうした場合成立時は最終稿のそれではなく現存する最初の稿体(Textzeug)のそれにしています。例えば、「Trompeten (トランペット)」は少なくとも最初の稿体は 1912 年の 9 月末か 10 月初めに成立しましたが、これは散逸しました。最も早い確実な稿体(1 H)は 1912 年 11 月前半に成立しました。したがってこの詩は「1912 年 11 月」の時期の詩群の中に組み込まれています。したがって最も早く成立し、そして成立が大体特定出来るかあるいは推定出来る現存する稿体の成立時がその詩の成立時とされています。

更に個々の詩についても、同じように成立順にその稿体が配列されています。例えば「An die Schwester (妹に)」を見ますと、稿体が 1H (Handschrift) ⇒ 2H ⇒ 3H ⇒ 4H ⇒ 5D (Druck) ⇒ 6D ⇒ 7D (6D と 7D は 2, 3 語しか変更されていないので変更された語のみを示し全体は掲示されていません)と並べられています。これによって、この詩の発展が、つまりどのように推敲、改作されていったかが一目瞭然に分かります。この詩の成立時は 1H のそれとなります (これは 1913 年の 1 月の 3 日から 15 日の間に書かれているので 1913 年 1 月成立とされます)。これに対しザルツブルク版も第 II 部において稿体を掲出していますが、変更された箇所のみを示す場合が多く読み取りにくいところがあります。

このようにインスブルック版は、出来る限り成立順に詩を配列し、また個々の詩の稿体も「Textstufe (テキスト段階)」—この呼称が、この版の性格を象徴的に示しています。つまり詩を発展プロセスにおいて見ていること—として成立順に配列していますので正真正銘の「Historische Aufgabe (歴史版)」と言えます。これに対してザルツブルク版は「歴

史版」を名乗っていますが、インスブルック版の前ではその看板を下ろさざるをえません。

この稿体の成立順の配列にあたって Hanspeter Ortner の編集哲学が援用されています。『Schreiben und Denken』(2000年刊)。Ortner によれば「書くことは考えることの形式、つまり知っていることを変え、手を加え、仕上げることで、それはある既存の世界観を映し出すことではなく、世界観を築き上げる行為である」と言います。すなわちこれは詩のイデーがアプリアリに存在しているのではなく、書くことによって次第に世界観が形成されていくという見解です。この見解が、インスブルック版の編纂者は、トラークルには極めて適合し、詩人は書くことによって、つまり稿体を積み重ねていく間に詩の内容と形式が発展させられていくと見ています。書き進めるうちに、表現ばかりでなく場合によっては目標さえ変わってしまうことがあると「An Novalis (ノヴァーリスに捧ぐ)」を例にとって説明しています。この表題は、初めは Auf einem Grabstein で、次に Grabstein となり、Im Traum を経て、最後に An Novalis に書き換えられています。こうしたことからトラークルの場合、稿体を成立順に配列することがより適切であると考えています。したがって Fassung (稿体)ではなく、Textstufe という呼称は、この思想に基づいているわけです。

またこの稿体の成立順による配列に関係があるのは異稿(Varianten)の重視です。この重視は Gunter Martens の、異稿は「文学の意味に関する、また詩学上の基本構造の欠くべからざる解明手段」であるばかりでなく、それどころか「変化のプロセスにおいて示される変動と発展は固有な、詩的な質を明示しうる」という認識を手掛かりとしています。

さらに編纂者は「書くプロセスを編集上、書くことの結果に優先する基本態度は、書くことを彼の人生の課題として見て、それに比べて書かれたしまった物に対しては奇妙に冷淡な態度をとったトラークルの芸術的な性格に適っている」とまで言ってその編集方針の一つとしています。

また双方とも「kritische Ausgabe(批判版)」を名乗っていますが、インスブルック版の編集報告において、「kritisch とは、この版では二重の意味を有している。一つは、テキスト批判とは確かなテキストを提供することである。もう一つは、すべての伝承されてきた資料をその都度テキスト形成過程が確実に再現されるよう秩序づける目的を追求することである」と述べていますが、この意味においてもザルツブルク版は不十分であります。しかしこの点においてインスブルック版は完璧に近い配慮をしていると思われれます。

2. 客観的(没主観的)編集

編集の仕方が非常に客観的(没主観的)であることがこの全集の特徴の一つです。つまり編者は解釈を出来るだけ控え、客観的事実を利用者に出来るだけ明らかに提示して、解釈は利用者に任せようという一貫した姿勢です。それは各稿体の取り扱いにも窺われます。

稿体に価値づけはせず、前に見てきたようにただ成立順に配列しているだけです。それは「何かある紙片に軽く書いたものも一定の期間—それが数秒であれ、数週間であれ—タイプで打った清書や印刷されたものに劣らず有効性を持っており、またそれらより仮初めのものであるというわけではない」という考えから発しています。したがって紙片にペンで走り書きしたものも、タイプで打たれた清書も、公刊されたものも区別なく成立順に並列されています。その象徴的例として、普通使用される、ザルツブルク版でも勿論使用されている Fassung (稿体) という語が使われていないことです。完成度の高い稿体でも断片であっても Textzeug (テキスト片) と呼称されています。このことは編者が意識的に価値判断を控えたことと前に述べた異稿の重視というより、異稿が形式上所謂最終稿 (der letzte Fassung) や公刊された完成稿と同等に扱われていることによります。したがって完成稿は稿体群の冒頭に掲げられていません。

3. その他

1) 「Einzelstellen-Erläuterungen」(個々の箇所注釈)について

ここでは主にトラークルの詩句に対して影響を及ぼしたと見られる他の詩人のそれが引用されています。最も引用されているのは、ランボーとヘルダーリンの詩句で、他にはボードレー、ヴェルレーヌ、メーテルランク、ニーチェ等のそれ、また聖書の章句も多い。確かにその引用の蓋然性が認められる詩句はありますが、むしろ影響の可能性が低いと思われる詩句も多く引用されています。例えば「Vorhölle (リンボ)」の詩句 Träumend steigen und sinken im Dunkel / Verwesende Menschen に対して「ein Sehnen [...] das, wie die Hände, langsam steigt und sinkt」(Rimbaud, 「Die Läusesucherinnen」)が「参照せよ」として挙げられていますが、両者のイメージは全く異なっています。共通の表現は steigen und sinken (steigt und sinkt) ではありますが、これは、「Offenbarung und Untergang (啓示と没落)」に見られる Fremdlingin のような特殊な表現 (ヘルダーリンの「Brot und Wein (パンと葡萄酒)」の Fremdlingin を参照せよ、とありますが、確かにここには影響関係が認められます) ではなく一般によく使われる表現で二つの詩句の間に影響関係はほとんど認めることはできないでしょう。ちなみに編纂者が挙げている例ですが、Die Weide weint 「Die drei Teiche in Hellbrunn (ヘルブルンの三つの池)」は weinende Weide (Klopstock の詩「Der Frohsinn (陽気)」) に似ていますが、「柳が泣く」というのは慣用的表現であるので編纂者自身両者に影響関係はないと取っており引用していません。しかし一般に深く考察せず目に付いた限り、同じ語や同じような表現があると、それをほとんど拾い出して記載するという姿勢が見られます。ここにもインスブルック版の、判断は利用者に任せるといふ精神が示されていると言えるでしょう。

2) 叙述の重複性と煩雑性

前述したように、現在収集されうる限りの一次的資料を纏めたことは画期的でありませんが、叙述が丁寧過ぎる余りと言いましょか、事項が重複気味の箇所も見受けられます。例えば「textgenetischer Überblick」において、後でその稿体が示されて明白に分かるにもかかわらず、その詩行や詩節の数が指摘されていたり、また前の稿体と異なった字句の詩行が示されています。したがって概ねこの「テキスト生成概観」は丁寧すぎる項目と言えるでしょう。

また前述したようにトラークルの自筆のファクシミリを左のページに、そのファクシミリをそのまま活字化したものを右のページに掲げています。これ自体そのまま対照して見られるので非常に便利ですが、この活字化されたものをもう一度、少し形式を変えています。稿体すなわち Textstufe として後に掲げています。丁寧さは良いのですが、重複と言えないこともなく、やや煩雑性も感じます。

纏め及び利用の注意点

このインスブルック版の編集の特徴を纏めて一言で言えば、前述したように詩の配列の編年体形式をとっていること、すなわち詩の成立順に配列していることであり、また個々の詩においても、その稿体の成立順に配列していること、つまり結果よりも詩の発展プロセスを重視した編集方針となっていることです。もう一つは、編纂者の価値判断が極力控えられていることです。

したがって利用者の留意すべき点は、詩がほぼ成立順に配列されていますので、詩の発展を研究する場合利する所大であります。また個々の詩の稿体も成立順に配列されているので、自らの詩についてほとんど述べていない詩人のポエティークを考察する上で資する所大であります。しかし最終稿あるいは公刊された詩よりも詩の発展過程を優先させる編集方針は、注意して見る必要があります。稿体の内、タイプで清書されたものや印刷に回されたものは、やはり一般に完成度が高いと見なされるわけですから、研究者は意識的にそれらに他の稿体とは違うより高いポエティークの実現を見なければならぬと思います。ちなみに編纂者も当初は「der repräsentative Text (代表的テキスト)」を掲げることを見込んでいたのですが、原則的な、編集哲学上の考えから具体化しなかったと述べています。やはりここでも価値判断を控えることを一貫させたということです。

したがってこの全集には詩が詩集の形で、すなわち『Gedichte』、『Sebastian im Traum』等が掲載されていないので（別巻にして刊行すると謳っていますが未刊）利用者はザルトブルク版も併せて参照する必要があります。といいますのは、特に前に挙げました二

つの詩集に収載された詩は完成度が高いのは勿論のこと、これらは詩人自身が纏めた詩集でありますので、そこに詩人の意図が込められているわけで詩の配列等を考慮する必要があります。

次に影響関係を主に示す「Einzelstellen-Erläuterungen」は、ザルツブルク版には全然なく画期的であり影響関係を研究するのに大いに役立ちますが、前に述べましたように、影響が疑問視される引用も多いので、利用者がそれを吟味することが大切であると思います。もちろんこの点について編纂者も引用を重視するか否かは利用者に任せると断っていますが。

しかしこのインスブルック版は画期的な版であることは言うまでもなく、トラークルの詩の高度なポエティークとその謎をいくらかでも解明し、ひいては「詩人の芸術上のランクを正當に評価」できるであろう有力な一助となりうるでしょう。

2011年度活動報告

1. 2011年度の総会・研究発表会は、東日本大震災による日本独文学会の中止に鑑み、中止することを持ち回り幹事会において決定し、開催されなかった。
2. 2010年度決算報告

トラークル協会 2010年度決算報告			
自 2010年4月1日 至 2011年3月31日			
収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	109826	会場費（船橋中央公民館）	1290
本年度会費	34000	切手代（葉書一枚を含む）	9240
		レターバック代	1000
		「トラークル研究」第七号印刷代	69000
		現金封筒代	20
		現金書留料	620
		本年度支出合計	81170
		次年度へ繰越	62656
		（内、本年度剰余金	-47170）
合計	143826	合計	143826

3. 「トラークル研究」の印刷所の変更

いままで「トラークル研究」を印刷していただいた旺正社の廃業のため、印刷をニシダ印刷製本にお願いする。

4. 10月15日(土) 2011年度秋季総会・研究発表会が金沢市文化ホールで開催された。
総会

(1) 2012年度総会・研究発表会

日時は、日本独文学会会場(上智大学)に近い公共施設を予定。

(2) 「トラークル研究」第八号の発行は、10月末日を目途に発行する。

(3) 「トラークル研究」第九号の原稿締切は、2012年8月末日とする。

(4) トラークル没後100年及び本会の創設記念企画として記念号の刊行、記念発表会、記念パーティー等が提案された。

研究発表会

伊藤 卓立 : トラークルの詩作品における色彩語「黒」(schwarz)の時代区分とその一考察

高橋 喜郎 : トラークルの詩における silbern について — ボードレールの『悪の華』におけるその用法も含めて

5. 3月9日(金) 2011年度幹事会が開催される。

お知らせ

1. 2013年度春季研究発表会に発表希望の方は、2月末日までに論題をお知らせください。
2. 「トラークル研究」第10号に論文等を発表希望の方は、2月末日までにお知らせください。
3. 会費未納の方は、御納入のほどよろしく申し上げます。

編集後記

あるよんどころない事情が出来まして発行が例年よりも大変遅れて申し訳ございませんでした。お詫び申し上げます。

さてトラークル没後100年まで後2年となりました。いままでも申し上げましたように当会としまして没後百年(併せて当会創設20周年)記念企画を考えています。企画事業の発案、参画をぜひとも会員各位にお願い申し上げます。(さ)